

十勝地方在住の古老の生活史から見た北海道開拓

染谷 臣道

教養課程社会学研究室

1. 目 的

社会的基層から北海道開拓史の一隅を明らかにすることが目的である。とりわけ、移住開拓に携わってきた人々の何が厳しい開拓生活を支えてきたのか、に焦点を絞り、考察する。

2. 方 法

十勝地方在住の古老に対する聞き取り調査を基本とする。聞き取りの内容は出生から現在に至るまでの家族構成を始めとした社会関係の変遷、生業の変遷、しつけや教育の状況、苦勞の状況とその克服、いきがいなどが中心となる。また、本研究に関係する内外の文献資料も可能な限り活用する。

3. 資 料

士幌および豊西在住の古老が語ったところの概略を以下に述べる。

A氏は明治38年に士幌で出生した。両親は岐阜県本巣郡の出身である。息子に生前語っていたところではA氏の父親は若気の至りで悪いことばかりしてかなりの借金を作り、親に北海道へとポエタクラレタ(追い出された)。彼もまた新しい気持ちで新しい土地でやり直そうと思い、隣村出身の妻と共に「美濃開墾合資会社」*の小作人として明治31年に渡道した。

A氏は12人キョーダイの2男であるが、1男は6歳の時に死亡しているから事実上彼は1男であった。そのために子供の頃から親に仕事を押しつけられ、小学校には半分位しか行けなかった。また、彼の弟たちは農業を嫌ったり見切りをつけたり、身体的な理由で農業以外の仕事についた。彼には9人の子供がいたが、病気や事故で3人の子供を失った。3人の息子のうち跡継ぎとなった3男の他は大工や家具工となり、農業から離れている。

17~8歳の頃から帯広まで馬櫓で枕木を運ぶ冬期間の馬車追いの仕事など苦しい肉体労働に従事、また、彼が34歳だった昭和14年に母、翌年に父、そして戦時中に伝染病で弟を亡くし、自分の子供に加えて弟の子供2人を引き取って育てるなど苦勞した。また、戦後間もない頃に4頭の馬を「コシフラ」で失い、直ぐに買い取った馬も「デンピン」で使いものにならなかったことは今も記憶に残る一大難儀である。

このように彼の人生には苦勞がつきまどっていたが、「どんな辛い時でも一晩寝てからまたやってみようと思い直して乗り切ってきた。こんなつまらぬ者も助けてくれる仏さんのありがたみに感謝したものだ。私は仏様に助けられたと思っている」と語っている。

* 「美濃開墾合資会社」については、士幌村史編纂委員会「士幌村史」昭和37年、148頁～158頁を参照のこと。

B氏は明治29年に香川県香川郡で出生した。7人キョーダイの末子である。実家は農業を営んでいたが、1町5反ほどの土地しかなく、しかも分家で土地が少なくなる一方だったこと、彼が小学生の頃には北海道開拓が奨励されていたことなどが移住開拓の間接的動機といえる。そして既に渡道し農業も軌道に乗っていた兄が帰郷し彼の渡道を勧誘したことが直接的な動機であった。B氏は21歳の明治36年に渡道した。

5町歩の開墾を皮切りに離農する者から土地を買収するなどして耕地を拡げ、数十町歩の土地を所有するに至り、農業を継ぐ3人の息子に譲り渡している。このように成功した理由として自分で方法を編み出した努力を挙げる。彼は「経済観念のない人が多い。農産物を4回に分けて売ると値がよくなる時に売れるチャンスがある。物を買う時も同じで、安い時期を選んで買った。これは誰かから教わったものではなく自分で考えたものだ」という。また、彼は今の孫たちの借金づめの経営方法を「失敗した方がいい。失敗は成功の元だから」と批判している。

生きがいは「これ（畑）を起こしたら自分のものになる」という楽しみだった、と彼は語る。また、「儲かったら帰郷するという人が十人中十人だった」とも語る。そして今の状況について「半年働いて半年は農休日、これは内地にはない。出稼ぎもない。建物も広い。上の人もいない（他人に使われることもない、という意味である）」とも述べている。

4. 考 察

開拓に付随する困難を乗り越えてきた要因を彼らの生涯史や文献その他から探し、列挙すると以下ようになる。

(1) A氏も述べるように、宗教が困難を乗り越える上で果たした役割は大きいと思われる。この点については、「開拓と宗教はつきものだ。開拓が始まればすぐに開拓僧が入っている。僧は開拓民の精神的支えであり相談相手であり、教育面での指導者であった」という別の古老の言葉が補強材料になるだろう。

なお、同じ意味のことを高倉新一郎も述べている（高倉新一郎「北海道開拓と宗教」、藤木編『北海道宗教大鑑』、広報（発行）、昭和39年、1頁～5頁）。

(2) B氏が強調したことだが、新しい環境に適應する上での工夫がある。それも体験を基礎にした強固なものである。この態度の背後に積極的な生への意志を感じ取ることができる。彼は村会議員、農協役員等を歴任しているが、それはその証左となろう。

(3) B氏が述べるように、広大な土地を持てるという夢、一旗挙げて故郷に錦を飾るという夢が開拓の苦勞を軽減した。

(4) B氏が語る「上の人がいない」という点は重要であろう。これはタテ關係を社会構造の基本とする内地の農村社会においては下層に位置していた零細農民である開拓移住民にとって大きな魅力だったと思われるからである。

(5) 土地や建物の広さ、半年は休めるという経営面のサイクル、出稼ぎをする必要がないことも魅力となっている。

- (6) A 氏や B 氏の話には出てこなかったが、近隣者同士、同郷者同士など地縁を契機とした協力関係も開拓を支えてきた点として見逃してはならない。ある古老は「隣もウチもなかった」と協力関係の緊密だったことを表現した。